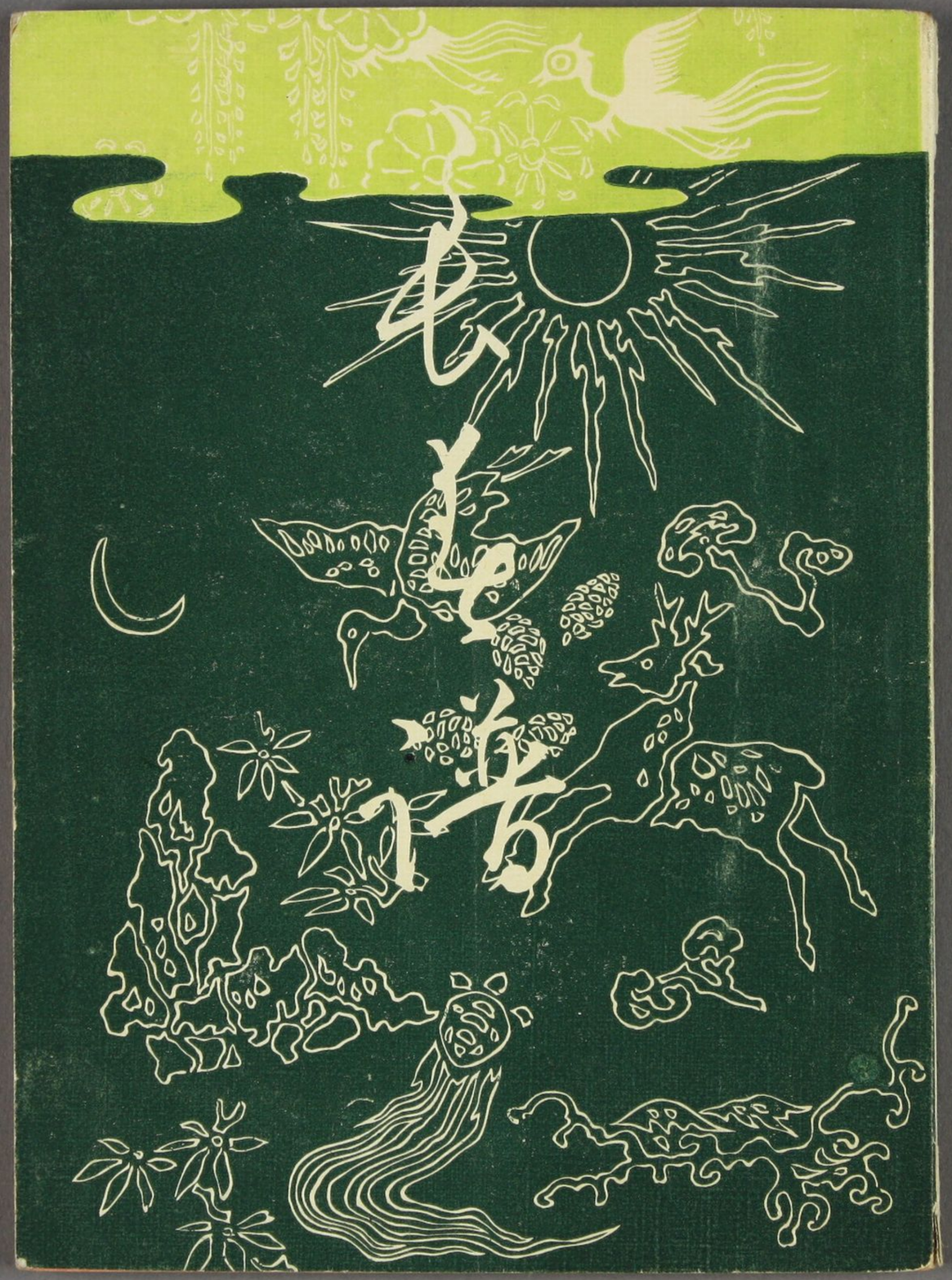
北京



明治參拾貳年一月拾七日內務省許可
明治參十貳年一月十八日遞信省認可

ふた葉第參卷第四號臨時增刊

長春譜

國の春

晴嵐

東宮、藤の紫に
金烏むれたつ、曙の空。
瑞光、四維に照り榮えて
邦家の山河、春長う。
あゝ、鶴千歳の曲を奏し

普天に謳へ、『國の春』
あゝ、民　萬歲の聲を勇み
率土に祝へ、『國の春』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一布衣、情にもろくして
感謝す、神に、『國の春』

東宮御婚儀を
祝し奉る

衣更へて舞ひ出でぬべき翁かな　素行
春王の二月妃を立つ梅の花　正信
千歲の松にからまり藤の花　同
四海皆歡喜の聲や靑嵐　同
白雁苑に入る而して尙花あり　世耕
紫や千歲の松に藤の花　同
二鉢の牡丹咲きけり簾の內　世耕

祝歌

千とせふる松はものかは春の日に
八千代をちぎるとも鶴の聲

渡邊霞亭

× × × × × × ×

ほぎごと
高ひかる日のみ子なれば照る月の
月のみやこの姫むかへまし

河井醉茗

鶴の歌

飛天白衣を
羽となして
世に鶴とこそ
名を得たれ

朱き冠は
天堂の
火盤に燃ゆる
火の雫
地に吉瑞を

乙谷紅杏

見たる時
榮の印象と
置かんため

今日富士の根の
そゝる邦
色むらさきの
雲を見る

行いて舞はんと
しのゝめの
空にだ羽を

浮かべたる
朝日金の
戸をあけて
光り導びく
雄々しさよ

天の光榮を
傾むけて
邦に注ぐに
似たりけり

聞けば萬民
　聲あげて
此處をも搖るぐ
　祝ひ歌

誰か浮世に
　渴仰の
跡絕えたりと
　あへて言ふ

嬉しきは、見よ
　時を得て

そのまめごゝろ
　あらはるゝ

樂吹く群は
　何處ゆく
高き宮居の
　垣めぐる

あゝ國民の
　よろこびは
此處にぞまたく
　集まるか

名譽、光榮は
　とこしへに
玉の殿居の
　上にあれ

皇、たぐひなき
　御座にて
萬の邦に
　秀づ可く
國永劫に

　世をつぎて
民は平和の
　兒たるべし

いで玉垣の
　松が枝に
白き翼を
　横たへて

調世に似ぬ
　一ふしに
この歡喜の

音を添へん

常に揺がぬ
宮の松
朽つべき枝の
あらざれは

長春安き
巣を組むも
夢しおどろく
煩らひはなく

嬉しかるべ記

齋藤溪舟

我が知れる人に某といへる四十男あり、この程我れに向うて、すこしく貴方にお話し申し度きことあれば、お閑暇の折、茶なと喫みにお遊びにおいでなされといふ。何んの用事とも判明らねど、折角いうて呉れることとなればと、春雨のしと〳〵と降る或る夜に、その某しがりを訪れつ。

ようこそと、郡内の座布團をすゝめられて、汲んで出されし玉露の色も香も、その人の情ほど濃かなるをすゝれば、主人まづ羊羹を我がために取り分けて、まだ物もいひ出でぬうちより、何かは知らず譯ありげに笑みかたふけたる、我れにはいぶかしくもまた可笑しくそ覺えたりける。

六尺の床に、六尺の違棚、床には景文の花鳥の軸をかけて古銅の牛の置物、投入には芽ばゑの柳二た筋三筋いけたるに櫻の花の白さをすこしあしらひたる、遠山のみどりの末に雲の凝りたらんとも覺ゑて嬉し、違棚には帙入の謠本ともおほしきと料紙硯りなどあり。楣間の額は梧竹の書にて關門不鎖寒溪水一夜潺湲送客愁といへる李渉が詩、黑色淋漓、筆勢飛動、滿天の雲盡く垂れて、南溟の水皆起つにも似たらんかし。此所はこの家の二階の六疊の間なり。そもの春雨はなほ軒を遶りて、しづかなる夜は八時を過ぎぬ。

おいでを願うて濟みませぬ。實は餘の義にもあらず。事、あまりに唐突なれど幸ひに咎め給ふな。貴方にはまだ定まる御細君はおはさずや如何に、聞かまほし、と主人の顔は瀬戸火屋の洋燈に照らされて白く、まことと濟まぬ面色なり。なるほど唐突の問ひふりければ

これはゝ迷ひて口も開かぬに扨ては早や極められたかと氣遣ひ顔なり。何事かと思へば妻の事で御座りましたか。其れはまだ不覺ながらと言はせも果てず、主人叩と膝を打て珍重といふ。

憚りながら珍重といはるゝ理由が判明りませぬといへば主人笑壺に入りて、然れはまこと貴方におすゝめ申し度き、いやさ何は措いても强ひてもおすゝめ申し度き似合の縁あり。お心はなきやといふ主人はかくいひて先づ二分の得意なり。

或る知人の妹にて年は十八。色白く鼻筋とはり、わたつみの底にありといふ眞珠を眸のうるはしきにたとへば、唇は散りのこる丹花のくれなゐふかきになぞらうべし。あはれ月下の梨の花のしづけさを其の心とまをさば、振舞のしとやかなるはいかで帙をいづるの白雲と云ひ得ざらましや。

女性らしさはこの娘の取柄ぞかし、先つ年そのふた親をうしなひて今は兄のみなれば、世の悲しさに女子の心も弱く、ふた親ゐましゝをりは花吹く風に柳の眉をはらはせ、草にやとる露をうけて紅粉をこらしたりけるを、今は烏雲玉山にくづはれて楚江の水に星の影もうつろはぜ、鳳花筐底に藏れて金環のひゞき綉繡の手にも聽くことなし

されど折ふしの心やり、三更の月に心つくしの琴をかなづれば清潭の水は巖に咽び、雲吹く風は松の梢をはらふ、一糸のひゞき高く揚れば一糸のひゞく低く沈み、月前の劍は昆玉を劈ざき書後の花は窓紗をたゝく。糸の音色の妙じければ魂雲漢の星にかよひ、思ひ蒼海の珠につらなる心地なり。

さばかりに心清き處女なればもとより浮きたる心はあらず。雅びの

みちにもかしこくて三十一文字に堪能ときけど、道にうとときわれは其の歌の情は知らずたゞ水莖の筆のすさび、靡くに柳の姿をおもひ走るに水のかたちをさとる。

貴方とは似合の夫婦、われは世の媒介口をかりて人をいつはるは好ましからず。貴方は我れの平生を信用したまふごとく今我がいふところをも信用したまはゞ、たゞ我れにまかせわはれ此の好縁をつなぎ給へかし。我れは其の處女ならば何も云はで貴方の心にかなはん事を知るものからかくは切におすゝめいたす。如何に御身。

如何に御身、此の好縁を諾し給はんと諾し給ふまじと、いづれにせよ兎に角一度は其れなる處女を見給へ。遠からぬ我方に遊びにくるべきよしなれば、その時はさそくに人をもてお許まで報して上げんほど、羽織なと被かへて是非に來給へかし。

など誠に言うて吳るゝ人もあらんには、如何に嬉しかるべきも、左様の事は容易くあるべきにあらねば、夢にふと見て獨りほゝゑまんもをかしかるべし。

奉祝の歌

三木天遊

日の本の御國の光
けふよりぞいよゝ照り添ふ
日の本の御國の榮
けふよりぞいよゝはえ添ふ
日の本の御國の基
けふよりぞいよゝ動かじ
日の本の春の都に
けふ「春」と「國のよろこび」

＊　＊　＊　＊　＊

かしこさに　身は　わなゝけど
嬉しさに　誠心（まこゝろ）　燃ゆる
民すべてかしこみ嬉しみ
かくぞ高麗　唐土にさへ
千代よばふ御代

×　×　×　×　×　×　×

東宮御婚儀を
祝し奉る

紀念切手の藤の花盛りかな　世耕

若竹や清涼殿に風薫る　重麗
薫風や御入内わらせたまひけり　修
御契り御行末を竹植ゑぬ　同
日の御子のことほぎ事や藤の花　鹿太郎
九重や松は幾代の風薫る　勘四郎

東宮の御慶事を
祝ひまつりて

鳳といふ鳥も今舞はんうらゝくと
神境（かみよ）かぼゆる今日の空かな　金子薫園

貧しくて献げん物もなき身には
それよ眞心こめし我が歌
ふたかたの御影の前にひれふして
御代よろづ代もほぎ奉る

歡聲

絶句

薄田泣菫

歡喜の音聲そらに響き、
巖戸にひきたる幕を搖れば
故はと、天人雲に出でゝ、
樂所の方をぞまもり見たる。

こゝには萬民酒をくみて、
幸ある此の日の祝詞かはし。
夕はちまたに松明ふりて、

光榮は御子にと狂ひ呼ばふ。

善い哉、本性今ぞ見ると、
嘉すか天人、令旨うけて
雲みな國見の臺をはなれ
灘經て二千里遠く去れり。

あゝよし照る日を顔に浴びて、
吾らは祝宴に興じ得んよ。

＊　＊　＊　＊

東宮の御慶事を　　金子薫園

祝ひまつりて
うからやから今日のよき日を健かに
迎へまつれり今日のよき日を

祝歌　　加藤眠柳

めでたさを我も歌はん千世經べき
御園の松にかゝる藤波

卯の花に花橘の契りかな　　重麗
かしこみてかざす牡丹や日の光り　　三郎

天緣無窮

臣　赤木巴山

明治三十三年五月十日、ことに記憶すべき日になんある。畏くも紫雲九重に靉く　皇城の奥深う、賢所の廣御前に今日を卜して　東宮殿下の大婚を擧げさせたまふ。かくて御國の基いや固う定まり、幾千代かけて榮えにさかえまさんこそ、尊くもいと〳〵目出度けれ。されば四民上下の鼓腹して歡樂さながら湧くが如なり。あなかしこ

御園生に千歳を松の若葉かな
歡聲や寶田千里蛙億兆

嘉辰令月

愛霞

紫雲のたなびきて
枝も鳴らさぬ相生の
松にめでたき鶴亀は
舞うて千年を送るなり

八洲石づゑ苔むして
波靜かなる四つの海
惠むの君の御代嗣に
御悅びの事ぞある

いや榮え行く日の本の
光もこれにいやまさん
かゝる時代に生れ來し
我が幸あるぞ有がたき

畏けれどもま心に
春ぞ久しき九重を
いざや祝はん諸共に
御壽のみき一つ

恭しく東宮殿下御慶事を
祝し奉る夏季六章　栃面坊

長き根やわやめの如き御契り
藥玉の固く結ばせ給ひけり
御睦びは薔薇の蜜より甘うして
東宮や今日のよき日を風かをる
芽出度さの語りもつきず明け易き
竹と蘭双び描きし扇かな

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ことはぎや末廣がりを奉り　重麗
三日の夜の餅たてまつる青簾　同
芽出度さのあまる八州や風薫る　修
めでたさのあまりて醉ぬ更衣　同
み祝の今日のよき日や牡丹咲く　新護

＊　＊　＊　＊　＊　＊

御宮初

木崎愛吉

春宮御宮初の大禮を、ことし、明治三十三年春五月十日と申すに、行はせ給ふとぞ仰出されたりけるはぎごと、ものしまつらむに、鶴の齡、松の翠は、世の常なり。文淵會の幹事達が、大禮恭祝の紀念にとて、この艸紙編纂の擧あるを聞き、今日恰も　大元帥陛下、觀艦式臨幸とありて、舞寸の行宮に、蹕を駐めさせ給ふ御盛儀を拜觀せはや、とて旅寢に明石の客舍に在る身の、去歳の秋　皇太子殿下、廣島行啓なへ、同じき御座所に在し、事ども想ひ起しつゝ、帝國海軍の壯を以て、千秋萬歳をこそ祝しまつらめ。

皇太子殿下、その折は、海軍の御職銜を帶ばせられて、軍艦淺間をば、御坐乘の御艦と定めさせられ、海路はるけく、廣島行啓の程に

上らせ給ひしにぞありける。

今や　大元帥陛下、親しく海軍大演習を閲し給ひて、觀艦式臨幸の御事あらせらるゝに當り、同じく軍艦淺間に召して、海軍の威靈を、中外に發揮せしめ給ふ。あはれ、四面環海の帝國の國光は、海軍に由りてこそ、赫耀たるなれ。海軍の名譽は　大元帥陛下　皇太子殿下の稜威に由りてこそ、顯著たるなれ。あな、尊とやあな、畏こしや。

御宮初の大禮は、皇室の大御榮の基を立てさせ給ふなりけり。海軍の雄力は、御國の護りのおごそかなるを表はすなりけり。鶴の齡、松の翠のそれに比べて、海軍の壯を以て、祝言申さむことのめでたさよ。

謹みて、この稿を艸しはつれば、淡路島山をうしろに、行宮を守り

奉れる御艦々々に、電燈滿飾といふことのものせられたるもめでたしや（四月廿九日夜明石にて）

祝歌

山中北渚

千歳、苔蒸す松の梢に
今宵怪しく靈雲降る
瑞祥四方にみち〳〵たるに
白衣の神將高きに聲あり

國のよろこび今日ぞ傳へて
國のほまれを今日ぞ歌はむ
祝ひかしこみ諸手を擧げて
幸ある國民謳ひ囃子せ

民、よろこびの酒を湛へて
民、ことほぎの盃に汲め
民、よろこびの衣をかさねて
民、ことほぎの歌を謳へ

いましが手にする大琴小琴
彈けや彈け、絃、裂けむ迄も
其聲遠く天に響かば
神は護らむ幸ある民を

いざやと雲に神將入りぬ、

＊　＊　＊　＊　＊

龜之歌

乙谷紅杏

世は萬代と
龜を呼ぶ
人のこゝろぞ
をかしきや

胸に神代の
銹は有れど
猶手の產毛
失はず

切初み神が
　鏃とり
背に彫りつけし
　花形の

三日經て死ぬる
　魚鱗に
くらぶ可きやは
　耻もなう

藻伏し轉寢
　夢を見て

春の惠みに
　遊ぶとき

水の面の音に
　驚きて
今波くゞり
　浮いて來る

見れば藤波
　松に卷き
綠、紫
　映ゆる蔭

乙女袖ふり
舞ひゆけば
童兒小脇の
皷うつ

歌ふは何か
いりほがの
それには似ざる
うたの節

『あゝ今日よりぞ

雲の上
常盤かきはに
榮ゑゆく

あゝ今日よりぞ
君が代は
千度千歳を
重ぬとも

今日は祝ひ日
わが皇太子の
ながき榮ゑを

祈るとて
若し鶴おりて
野を蹈むも
弓し絞りて
うかゞふな
歩み天女の
うしろつき
鶴はちとせの
齡あり

若し龜浮さて
沙這ふも
小石拾ひて
近よるな
首すくめたる
翁さび
龜萬世の
いのち有り
來たれ、よちこら
うちつれて

今日の祝儀を
ことほがん」
見れば白鶴
松が枝の
深きみどうに
横たはり
鳴くは千年の
春の曲
邦の嘉辰を
高く呼ぶ

いで岩の上
見る夢に
御代の萬を
比へつゝ
藤の花洩る
日の影に
古き甲をや
暖めぬべく

日の出

齋藤弔花

浪の一夜は實に興ありき。數ふれば春去り秋過ぎて一週年、圖らざりき、御慶事と同じ日は五月十日、これ何の縁と、思ひ出づるまゝに其夢の跡をしるして、聊か祝意を表し奉らん。

鐘は興津か浪の音と、われは浮ふがまゝに句を爲さゞる詩を吟みつゝ、夕日彼方の波間に落ちて、蒼冥たゞ漁火と星との村の間を巡りて、東海の濱を徘徊(さまよ)しことありき。

袂まく風は涼しかりき、微醉の頰に乱れ毛のはら〳〵、女ならば情あるべく、縺かゝるを拂ひつゝ、足は輕き駒下駄に寄て殘されし貝殼ふみくだきつゝ、やがて村の盡場(はづれ)に入れば、燈は前の家の軒に明るく、謠は後の圃より

洩れり。

『尋ねましよ。

『はい。

と優しき聲して

『誰方(どあた)さま。

と戸を細目に開けて、又ピシヤリ、

『母樣々々。

と慌たゞしく、

『何だい、急がしい。

『ホ、、、、、お客樣！

戸は再び半白の婦人を見せぬ。此方よりせぬ間に、彼方より腰は屈すりて、

『何か御用でがなござりまするかい。
見ればこのあたりは皆漁人なるべき世界に、珍らしき品格ある人品なり。
『宿はありますかい。
あまりに突飛なる吾問ひに、
『エ』と耳を傾けつ。
『何處か泊めてくれるところはありますまいか。宿を鎌倉に取って置たのですが、あまり美しい浦の景色に見惚て、今宵はこゝに明日の朝景色が見たいので。』
『左樣でござりまするか。
ゞ兎角入らッしやいまして、お構なくば。』
馴れ〳〵しくも愛想よく、伴はれて、われはこの家の六疊の座敷に

而かも上座の客。折から表を人のこゑ。
さッさッさッ。
足音のばた〳〵〳〵。
『何ですかい、表は。』
主人の答もなきに表に人の、
『もうお嫁さんの來る時分だ。今度の御婚禮は村の第一の立派なのだから見さッせい、己等の百層倍程の荷物だ。
『そら來た。』
『どれが。』
と騒々しくも人の賀を羨むなり。
『お客樣も御覽なされ、田舍の婚禮も亦面白いものでござりまする』
『さう！』

さきの乙女にや年紀十五六のいと愛くるしさが、

『おッ母様來ましたよ。』

予は起ちて戸口に出でつ。幾多の弓張に菱の定紋付たるを先たゝせ、極粉色の京人形然たる花嫁御を擁護しゆく鼻の高き芝居に見たる仙崎彌五郎の如き其附添人の後に、紋付着たる老夫婦のいとまめげなるを見たり。

しばらくして予等はもとの坐にかへりぬ。

燈は一間を照せり。こゝの家の主人は二三年前より鯨獵に出でし事、この母子は昨冬東京よりこゝに歸り來りし事等を聞き、今宵は村も大取込なれば、一夜をその家に宿るべき決心を爲せしまでに、九時を過ぎたり。

『運命ていものは判らないもんでござんすよ。』

話頭は意味長し。

『今日の嫁ですね、あれは三濱と申す田舍の豆腐屋の娘でござりまするが至りて親孝行で、自分が夙うから起きて豆を炊き、臼を廻し、丹精して老人を安樂にさせた相ですが、それが當村第一の素封家に知られて、到頭その嫁に上げられましたのですとさ。

と夫れよりこの村に目出度爺の九十三まで夫婦にして、十三人の孫と四十九人の曾孫を持てる嘶に及び、辻の地藏の齡は神武天皇時代から先へ三千年程のものであらふ抔といふ據りないことに花が咲き、

て、その間に娘のくす〳〵笑を交せる、この夜はいと樂しく、いと罪なく、可笑しく明くれば、

『さア參りませう。』

と娘は甲斐〳〵しく予を伴ひて濱に出で、

『妾貝を拾ひますから。』

と先に立ちて、

『一寸東京のお客樣踊いて入らッしやい。あゝ面白いのがこれは何でせう。』

『これは櫻貝。』

『これは？』

『帆掛貝。』

『ホ、、、、、可笑しな名ね。』

と優しき笑を遺し、

『待つて！今度は大きのを捜して來ますから。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

聞く、この子も今年東京に、さる貴族に、宮仕の身となりぬ。五月

十日、

此慶事に賑ふべき東京を見て、去年の昔を思ひ出づるや否や

奉祝の歌

三木天遊

春、けふ國に
祝あり、
祝、たとへば
朝日子か、
東、雲井に
照り、やかて
光、天が下を
みてるかな。
春、けふ國に

祝あり、
祝、たとへば
朝日子か、
羽ふり、百鳥
巣立つごと、
わび人もうきゆ
踊り起つ。
春、けふ國に
祝あり、
祝、天にも

通ふらん、

稚子民、もとめ、
　雲をみず、
いふ、うらゝかなり、
　日本晴。

春、けふ國に
　祝あり、
祝、天にも
　通ふらん、

老たる民いふ、
　よろこべば
酔へばおかみも
　わざをやむ。

春、けふ國に
　祝あり、
祝、神代を
　現ずらん、

山つみ、よいかな、
　禮服(らいふく)を、

松、藤　摸様、
　わかみどり。

春、けふ國に
　祝あり、
祝、神代を
　現ずらん、

わだつみ笑める
　頬に　ゑがく、
鶴、龜ゆた〳〵、
　動く繪を、

春、けふ國に
　祝あり、
祝、さながら
　なごみなり

もと有情ぞと
　龍田彦、
見よ、佐保姫に
　へりくだる。

春、けふ國に

祝あり、
祝、さながら
なでみなり、

萬歳、億の
聲にして、
知れ、心こそ
ひとつなれ。

春、けふ　國に
祝あり、
祝、光榮の

新よそひ、
うるはしいかな、
人草の
花、まめ心
さき匂ふ。

春、けふ國に
祝あり、
祝、さかゑの
新よそひ、

うたふ雲かな、
　うたふ霞、
心の松かな、
　いける　琴。

春、けふ國に
　祝あり、
神代ながらの
　日は天に、

春、けふ國に
　祝あり、

神代ながらの
　威はとはに、

大君八千代
　しろしめせ、
長春（とこはる）、春の
　宮にあれ。

翠竹紫藤

翠竹徳雨を得て色ます〳〵深く、紫藤恩風に靡きて香いよ〳〵濃やかなるの時、寶田の千代田の宮城に億萬年の皇基を擁護したまふ　賢所大前に於て　皇太子殿下東宮妃と定めさせられたる節子殿下と天縁を結ばせ給ふ、仙禽松が枝に千代を祝ひ靈龜岩が根に萬歳を壽ぐ、位山たかきに上る御わたりより麓をだに得踏まぬ草莽の民に至るまで今日を生日の足日と歡躍せざるぞなき。

紫禁雲深く竹園茂れり不老門の内長生殿の上桂槐枝を交へて賀燕時となく丹楹に往來すれども

皇室の尊貴に在しますは實に八柱にこそあれ聖壽日月の如くなるに東宮新たに妃を立てさせ給ひつれば　皇孫のあれさせ給ふこと數へ盡されず竹の園生のいやつぎ〳〵に茂りまさんことをいと〳〵慶ばしき事ならずや

上の叡聖にして允文允武にわたらせ給ふは御幼沖にして維新の鴻業をせさせ給ひ國亂を戡定して新政を創めさせられ智識を宇内に寛め公議を興論に決し北の方蝦夷が島根を拓き南の方琉球を懷け憲法を布きて三權鼎立の美政を興し法制定りて法治日に擧り皇師を發して支那を征し臺灣新に版圖に歸す陸海軍の整備は先進列强の班に進み治外法權撤せられて坤輿の外臣恩露に浴するを以て見れば御美德擧げて算へ難かるべし

皇后の宮の御事もまた天性御穎悟にわたらせられて皇猷を翼賛せさせ給ひ華族女學校を興して女子の淑德を高からしめ赤十字社を創めて親躬ら之を御統督せさせらる農蠶に手藝に文學美術に風俗儀禮に

親しく御奬勵遊ばされし事九十九の磯の眞砂の數は拾ふとも得も算へ盡されまじ殊に至仁至慈に在しませば慈惠醫院の御創立は申すに及ばず常に黎民の痛苦を諮ねて御池に遊ぶ水禽の足にはよしひまあるとも御懷の休らふ間もおはしまさぬよしは事に觸れ物に應じて屢漏れ承はる所にして感泣の涙搾き袂にかわく間なければことゞく記し奉らん要もわらじ

兩陛下ともに國家の式禮の漸く弛廢するを太く叡慮にかけさせられたび婚嫁令の制定に際しては皇家おづ嚴そかなる典例を起して婚嫁の苟もすべからざるとを示させ給はんとて悉く賢所の大前に式を擧げ大謁の令を下し給ひしは偏へに大御心に出る所なりとこそ承はりつれされば御束帶御物の具の調製はかたく機械機を用ふる事を禁ぜられ悉く固有の手織を用ひよとまで御内意ありつる程にて婚姻

の神聖なるべき所以を敎へさせ給ふこと皇家を以て國民の摸範たらしめんとての叡旨にあらざるはなし御聖德の宏いなる仰ぎても仰ぐべきかな

大内の御事はしも餘りに申さんは畏し其御美德は皇子皇女の御性行に現はして仰慕の念の禁め難きものあればこゝに謹んで筆をとゞめて皇子皇女の御ありさまを伺ひ奉つりなん

東宮御所

東宮の御座所は花の御殿と申し奉る赤阪離宮を東宮御所に定められしも今は御造營の設計中なるを以て假に青山離宮に在ます

皇太子殿下は御名を嘉仁親王と申し奉り　今上第三の皇子に渡らせ玉ひ御稱號を明宮と申し奉る明治十二年己卯八月三十一日御生誕、二十年八月三十一日　東宮宣下あり、二十二年十一月三日　皇太子に立たせ玉ひ三十三年二月十一日公爵九條道孝の女節子姫を立てゝ皇太子妃と定めさせられ此月此日(五月十日)を以て御婚禮の御式を擧げさせ玉ふ

殿下の御美德はしも偏く國民の仰ぎまゐらす御事なれば幾度か繰返しまつらんも畏ければくだ〳〵しきは省きまつりて茲には御學歷幷に御年譜のあらましを承はるがまゝ記しまゐらせ第百二十二代の九五に登らせ玉ふべき春の宮居のいかに叡聖に渡らせおはしますかを尊影を拜する人々の爲に栞せん

東宮の御教養には　陛下の尙祐宮にてまし〳〵つる御嘉例にならはせ玉ひて中山忠能公に御教養を命ぜさせられ公が邸內に明御殿を營みまつりておふしたてまゐらせられたりけり、さてあまりに御教育を急ぎ奉らんは御發育上如何あるべきとて御體育をのみ專らと爲しまゐらせ明治二十年九月十九日殿下御齡八年二箇月にして初めて學習院に御降學あらせられ豫備科第五級に入らせ玉ひ翌二十一年七月の大試驗には御缺席遊ばされ二十二年七月に至りて豫備科第五級を御卒業遊ばし二十三年七月には豫備科第四級を御卒業ありき此年九月より改正學則を實施したるを以て更に初等學

科第四年級に入らせられ二十四年七月同學科御卒業、二十五年七月には初等學科第五年級を二十六年七月には初等學科全科を御卒業遊ばされたり明る二十七年六月二十日東京の地大に震ひて學習院の本館校舍廢物に屬したりければ更に花御殿に於て御稽古あらせらるゝ御事と爲りて川田剛、本居豐穎、佛人サラセン其他侍講仰付られ後三島毅川田侍講に代り以て今日に及べり、仍りて二十七年七月學習院は中等學科第一年級の御卒業證書幷に本學年の御成績に關する讃辭を奉呈したりしが二十七年八月二十日に至りて自今御降學あらせられざる旨宮内大臣より口達ありて此に全く學習院の學籍を出でさせ玉へり

更に御職務に關する御履歴を承はるに二十二年十一月三日立太子の御事あるや陸軍歩兵少尉に任せさせられ大勳位に叙せられ玉ひ

近衛師團の御軍籍に入らせ給ひ二十五年十一月三日には陸軍歩兵中尉二十八年一月四日には同大尉に進ませられ三十年七月は御成年に滿たさせ給ひしかば貴族院に議席を占めさせ給ふ本年二月十一日陸軍少佐海軍少佐の兩御軍職を帶びさせ給ひぬ

妃殿下は前掌典長從一位勳一等公爵九條道孝卿第三の息女に在して去んぬる三十二年八月二十四日といふに畏き邊りに於かせられて

皇太子妃にぞ御内定遊ばされたりける

九條家の系統を攷ふるに大職冠藤原鎌足公十七世の嫡孫攝政關白太政大臣忠通卿の第三子月輪關白太政大臣兼實卿の苗胄たり鎌足公十世の裔正二位左大臣師輔卿に至り初めて家を九條と稱せり蓋し其邸九條に在るを以てなり爾來子々孫々世攝關を襲ぎ常に皇室の外戚を以て宮廷を補佐せり當主道孝卿は正三位權大納言幸經卿の長子（

所生は從一位關白尙忠卿、尙忠卿の第六の息女は　英照皇太后宮と仰がれ給ひき)なり、天保十一年五月朔京師に生る、　幼名優麿、戊辰の役奥羽鎭撫總督たりき、明治十二年十月二十三日　明宮祇候たり又宮內省に出仕し十七年十月掌典長となり二十三年十一月には貴族院議員に任せり、令嗣は掌典兼式部官正五位道實卿とす、節子姫の御方は明治十七年四月に誕生ありて今年十六歳とぞ算まゐらせたる

道孝公

- 道實……生母中川局野村氏　明治二年十二月誕生　嫡子
- 範子……生母同上　明治十一年四月誕生　山階宮妃殿下
- 良政……生母スミ子田村氏　明治十四年十月誕生　……
- 籌子……生母中川局野村氏　明治十五年八月誕生　本願寺法嗣裏方
- 節子……生母同上　明治十七年四月誕生　……
- 良致……生母スミ子田村氏　明治十七年七月誕生　……
- 良叙……生母同上　明治十九年十二月誕生　……
- 富子……生母同上　明治二十四年二月誕生　……

維新前藤氏攝籙の家より立后あらせられし時代に在りては五攝家自ら其次序ありて申すも畏き今の皇后宮には一條家より御入內あらせ玉ひつれば此次は鷹司家にあらずば近衞家に取らさせらるべきを近衞家にはふさはしき姫君おはさゞ鷹司家には今年十六歳の姫君あれど　英照皇太后宮御在世の砌御旨を遺させ玉へりし次第もおはせば　皇太子妃は節子姫の御方に御內定遊ばさせられたりと承はりぬ、さればにや道孝卿は八月七日京都に入りて泉山なる　英照皇太后宮後月輪東北御陵前に於て自ら祭主となり舊臣の人々を召し集へて御祭を行ひ右御內定の事を奉告あり其折舊臣へ事の趣つばらに告げ

知らせられきとぞ、御内定の事に就ては舊例には兩親打揃ひたる方ならでは叶はずとの議あり卿の奥方は疾く逝去ありけれど姫の生母中川局（野村幾子）生存あれば差支へあらぜとありて斯くは御内定を承はるに及びしなりと傳へられぬ

八月二十六日には東宮大夫侯爵中山孝麿卿　東宮其頃日光御用邸におはしゝ御許へ伺候し立妃御内定の趣　殿下へ言上に及ばれたりきと申す

斯かりければ節子姫は八月限りにて華族女學校退校ありて赤阪福吉町の公爵邸へ下田歌子刀自始め教師の人々を召寄せられて習學あり、姫は在學中北白川女王殿下と共に學力優等にして本年の末には卒業あるべかりき、手蹟も美事にて彈箏にも堪能の譽れありとぞ、道孝卿は姫の華族女學校附屬幼稚園に通はれたりし頃より現今に至り

教訓を受けられたりし内外の教師一同をば一月二十九日自邸に招待して茶話會の催しありき華族女學校退校ありて後は專ら佛語學を研究あり和漢の文學及び普通學科は國手の勸めに任せて當分中止となり毎日修められたるは

自午前九時至同十一時　佛語學　佛人サラザン氏教授
自午後一時同至三時　地理學　秋山四郎氏教授
自午後四時至同五時卅分　音樂　幸田延子　教授

の科目にて課餘には時々芝公園及び近郊へ運動の事ありきとぞ

高輪御殿

芝區伊皿子臺町といふにあり元は肥後の領主細川越中守の中邸にして赤穂の浪士大石良雄以下十六人の事ありしは、此所なり、久しく海軍病院となり居たるを明治二十二年御料地となりて設計を定め二十三年より造營して二十五年に御移轉遊ばさる此御殿に在しますは

第六の皇女、第七の皇女の御二方にして即ち

常宮昌子内親王殿下

周宮房子内親王殿下

にわたらせ給ふ常宮の御方は明治二十一年戊子九月三十日の御生誕にして御齡正に十一年九箇月に在しまし、周宮の御方は同じ二十

三年庚寅二月二十八日の御生誕にして御齡正に十年四箇月におはします、伯爵佐々木高行御教養主任の仰せを被りて傅り奉れるなり

常宮の御方は恐れ多き御事ながらあまた皇女のおはしましながら一柱も御成長遊ばさせられざりし後の御生誕に在しましゝかば　兩陛下にも殊の外大御心を惱まし給ひいかにもして健よかにおはしたてよとの御内意を承はりしにぞ主任の苦心一方なちぞ單へに御健康の上にのみ心を用ひて夫人令孃にも心を得させ餘りに尊敬の度を超ゑぞしておのが愛子を育むが如く御智育は自然の御發達にのみ任せ唯御體育を專らとして御養育なしまゐらせたりければ丹精の効空しからず僅かに生齒熱に御惱おはしましゝのみにて御健康劑の外は御藥をだも調進し奉るは稀にして尋常の子供には勝れて御發育もめでたく御健やかに麗はしく御成長遊ばされしぞ限り知られぬ皇運の極み

なりけり

姉宮の御方の御祥かくめでたくおはしましゝかば周宮の御方にも何の御恙もわらせられず二方ながら同じ御殿におはしまして日毎夜毎に御睦まじう御學問に御運動に御手を携へて誘ひ誘はれさせ給ふ御愛らしさは地下の子等の較もすれば姉妹互ひに相爭ひ足ずりして泣わめくものに一目なりとも拜ませたき事にこそあれ

御殿に在しましても夏冬の御用邸に渡らせ給うても朝は五時頃より御目さめ遊ばし春分秋分の差はあれども六時より晩く御起床ありし事は在さず御手水のゝち冷水もて御身體を拭ひまゐらするに一たびも冷たしなど御むづかり遊ばしたる事なくして御召かへのゝちは牛乳を聞食し朝餉のゝち夏は八時より冬は九時より御學問所に在まして御教育を受けさせ給ふ、御修身と歴史および御作文とは華族女學

校學監下田歌子、御算術と地理および圖畫（鉛筆畫）とは堀江義子、御讀書は小川直子、御習字は阪正臣、西洋音樂は遠山甲子承はりて嚴肅に御教へ奉るに御天性聰明に渡らせ給へば御進歩も著るく常宮御方の如きはひたすら御健康をのみ案じまゐらせ御就學の期もいと後れ給ひしに拘はらず今は華族女學校の初等中學第一學年の課程に進ませ給ひ周宮の御方は同じ學校の小學第四學年を半過ぎまで卒らせ給へり、此外に輓近は御歌をも遊ばさるゝより下田歌子これを擔任して御兼題をまゐらせ御詠艸を添削しまゐらするなり、御晝は必ず御洋食を進むる例にて時には御好みの程もいかゞにかと氣遣るゝ御料理あれども御二方ともに一言の好惡を仰せられし事なく何ものにてもいと好しげに聞食す、御食事のゝち霎時御休憩ありて午後一時より二時三十分までは御學問所を出させ給はず御放課のゝちは御

散歩御運動あり て常の御殿に入らせ給ふは三時四時が程なりとぞ、是よりは專ら御氣を轉じ奉るために種々の御遊戯を進めまゐらせ御入湯、御夕餉のゝちもまた古今がるた、文字繋ぎ、貝合せ、おハジキなど飽させ給はぬやう種々に取かへて御機嫌をつくろひ夜は八時三十分若くば九時を期して夜のおとゞに入らせ給ふ、御安眠までは民間の小謠にかふるに歴史上專ら御淑德に關する件を讀み上ること御幼稚の頃よりの例ひとこそ聞け、是御日課の大要なり

肅毅にして堅忍の御性質は父帝より承繼せ給ひ穎悟にして慈仁なる御美德は母后より化育せられ給ひけん所詮臣下の者のつとめても得べからざる御淑德に富せ給ふは人の胤にて在しまさぬ證とこそ仰ぎ奉つれ御運動の折などは廣き芝生を蝴蝶の如く驅けさせ給ひ或ひは溪に下り崗に上り又は鞦韆に上りて搖らせ給ふなど目も勞るゝばか

り御輕敏に在しましながら端近なる御用邸近くは大磯なる大隈伯別邸に在しましては誰教へまゐらせねども輕々しく嬉戯し給ふ御事もなく御運動の折にも嚴肅に在しまして犯しがたき御威嚴の見ゐさせ給ふはこれをや皇祖皇宗の御遺傳と稱へまつるべからんかし、朝の御運動としては夥多の盆栽に水を與へ給ふが例なるが歳の暮より歳の首は百官有司の御機嫌を伺ひ賀を上るものひきも切らねども其都度必ず拜謁仰せ付けられて御愛嬌麗はしく御答禮遊ばされ幾百人に及ぶとも少しも倦せ給ふ御氣色なきのみならず幾時間を經るとも御座動ぎて御姿勢の崩るゝこと在しまさず事はて〳〵のちいと〳〵御滿足の御模樣にて御勞れの色とては見ゐさせ給はず餘りに御遊びに興じさせ給ふ折などは强て拜謁を願ふも恐れ多しとて退下するものあれば後にそを聞召しては『某は宮樣が御遊び中と思つて遠慮したさ

うだが宮様はいつでも御逢遊ばすから次からは直に申上げて呉れよ』との仰せあり現に本年一月の如きは『御食事中でも宮様は何遍でも御立ちになるから參賀の者があつたら一々執次で呉れよ宮様はちッとも御厭ひ遊ばさんから』との仰せ常宮御方より下りて朝夕親しく仕へまつるものも思はず感涙の流るゝを覺ゑざりきとぞ

また御翫具の如きも決して好悪の御沙汰あることなく如何なる疎雑の物にてもいと好しげに御賞美遊ばし獻上品とありては某の心をこめて差上げたる物なれば大切にせよとの仰せあり其志を愛させ給ふ近例として左の一節を讀まば誰かは一掬の感涙を覺ゑざらん

過る三十年の夏の御事なり御二方には伊豆の三島に御成在せらる静岡縣より御案内として參上したる大井屬御つれ〴〵を慰め奉らばやとて三島の浦曲に石拾ひの御遊を進めまゐらせけり周宮の御

方は猶六年幾月と申す御幼稚にわたせらせ給へば例の事とていとかひ〴〵しく幾多の石を拾はせ給ひ御歸りの程には吊臺に山をなして人夫の肩もいとたゆげなり常宮の御方少し捨てよと仰ありしに周宮の御方手ばやく大きやかなる五箇の石を選分け給ひ『此外のは宮様がお拾ひ遊ばしたのも皆が拾つたのも内輪のは捨てもよい』と仰せ給へり御附の者更に申上るやうさる石は東京にも候へば序に捨てさせ給へとありければ御頭をふり給ひて『是は折角大井が拾つて宮様へ差上げたのだから東京へ持つてお歸りになる一箇でも捨ては大井に氣の毒だ内の者とは違ふよ』と仰せらし悉く御持歸り遊ばされたり

以て他の好意を厚く思召す御美德の一端を知るに足りなん幾多の石を只一目の下に御覽じ分けさせ給ふ御聰明さへあるにあどけなき御

口より如上の仰せの下ること六歳七歳の頑是なきものに望まるべき事かは敎ふるとても得もこそ言ふまじけれと思へば記し奉るも畏くてなん

御友愛の御ありさまは伺ふも恐れあれど御容貌にも見ゐさせ給ふ如く御遊戯はかひ〳〵しく在すれど姉宮御方は温和玉の如き御天質にして乙宮御方は御敏捷に渡らせ給へれど苟且にも御諍ひ遊ばされし事在さず例之御翫具を獻上するものあり多くは同色同形の物を獻ずれどもさる品の調はぬ時は色異れるを獻ずるものなきにあらず此時之を御前に御披露申上ぐれば姉宮まづ御一覽遊ばされて『宮様は孰方を御召し遊ばす』と周宮御方に示し給ふ『宮様は孰方でも』と一應御辭退あるを強て好ませ給ふ方を周宮御方に選ばせられ御親らは殘の品を納め給ふからは決して御諍ひの生ずる事は在しまさぬと

ぞ

上に立せ給ふ御器とは申しながら他の勞苦を察し思召す御心いと深く在します御修身の談話若くは御枕の伽に讀みまゐらする歴史談の如きも幾年積る事なれば折には同じ事項を覺ゑず申上ぐる事あり再三ともなればそは一たび御聞遊ばしたる事なりと注意するに『イヽエ宮様はお覺ゑがないよ、まだお聞きにはならんのだらう』と仰せありて倦ませ給ふ御氣色もなく御耳を傾けさせ給ふ其御事例を擧げまつらんに

是も三島御成の時の御事なりさ御水屋の人足の怠りがちにて時に御用を缺く事ありしかば去年箱根にて召抱へたる御水屋人夫はいとよく老實なりしかばそを呼て召使はんかとの評議あり大むね斯と一決したり折しも御畫を召させらるゝ折なりしが職司の者を御

前に召して常宮の御方仰せらるゝやう『水屋の御用を免すさうだが宮様は御好みで入つしやらぬ箱根の水屋がよいとて三島へ來ては悪いかも知れぬ遠方から呼でまた斷わるよりは今の水屋によく敎へてやつたが宜からう知らんから勤まらぬので敎へたら出來る敎へやつて出來なければ其者を罷めて三島の水屋に御用を申し付けるがよい箱根では箱根の者を使ひ三島へ來たら三島の者を使ふがよい其土地の者をなるべく使ふやうに』とありければ常に仕ふる職司ながら今更に覺ゑて斯と縣屬に語り村長して件の水屋に思召の程を傳へしにぞ賤心なき人足ながら兩眼に涙を浮べ翌日よりは朝蚤くより身を粉にして御用を勤めたるに職司も其智の及び難きに慙愧したりとなり

皇室は慈善の淵源に在しますとは申しながら仁恕憐愍の御美德に富

ませ給ふぞありがたき別きて人の過失を咎むる事を厭はせ給ふ御心深く在しまし御親らは何事をも忍ばせ給ひて今日まで暑し寒しを御口に出し給へりしを伺ひまつりし者なきのみならず御惱の折にも御苦痛は在しまさぬやと伺へば御笑みを湛へ給ひてさまでには覺ゑずと仰せあり又おものなどの腫出しゝ折に御痛は遊ばさぬやと申上ぐるもいなとよと仰せ給ひいかならん痛苦をも御色にだにはのめかし給はぬは　陛下が堅忍不動の御性質をや承け給ひけん所詮は凡人の遠く及ばざる御性質に在すべし御自身は斯く在しながら人を憐ませ給ふ御心深く御愛器など毀ちたるものありても一向に咎め給はず過失にて毀ちぬと謝し奉つれば『オゝさうか宮様は忘れて入ッしやつた、よいよ〳〵』と仰せありて二たびは追窮し給ひし御事あらじ其御美質の一端を伺ひ奉つるに

今年大磯御避寒中の御事なり小田原の市中を御遊覽の御事ありて〻は往來に水道の通ずる處とて御徒歩の事なりければ警部は謹んで御先導なしまゐらせしも男の足なれば皇女の御足よりも歩合ひ廣く常宮御方には誤つて板の端を蹈ませ給ひ少しく陷らせ給ひて御轉び遊ばしぬ御附の人々も色を變じて抱き起し奉つらんとする端に忙がはしく起直り給ひて佐々木伯を召し『何ともないよ御怪我は遊ばさんよ、ぢい（伯を指して呼せ給ふ）、宮樣がお惡いのだよ、先へ行く警部が行つた通りに行けばよいのに、宮樣が後から行きながら少し脇をお通りになつたからお落ちになつたのだよ』と御口早に仰せ消されしかば警部には何の遠慮もなくて事濟みしが其後いかに伺ひ奉るとも再び此事を御口に出し給はず御機嫌麗はしく御遊覽ありき

是併しながら御歴代一貫不變の御特質に在しまし皇家尊貴の係る所にしてかくとぞ吾が大君の御前に死なんことを願ふ民草の國擧りて茂れるならめ

三十一年の夏箱根離宮へ行啓の折から山中に御野立あり御調度の御荷物を先に運ぶもいかゞなれど御着までに必用の御調度もあれば御野立の前を例の雲助歌うたはせて通過させなんには御興にもなりなんがと評議の上かく計らひしかば雲助等いと榮ある事に覺えて汗もしとゝに聲はりあげて節おもしろく謠ひはやし勇ましく御前を上り行きぬ御氣色いかゞにやと御興の程を伺ひけるに『某はつまらぬ事をする男よ、脂汗をかいて苦しさうな聲を出して重い物を荷ぐのが何故面白い、宮樣は氣の毒に思召したよ』と凛として御諚ありしかば案に相違して某は悔恨措く所を知らず更に御

詫を申し上げしかば唯『われも營業だから』と一言仰せられしのみ

尚くさ〳〵漏承はれる御美德に乏しからねどさまで記し奉らんも恐れ多ければ謹んで洩しつ

附錄に掲げ奉れるは御正式の御服裝にして下に紅梅の匂をめし上に有職織模樣の緞子を召させられ御切袴は濃紅色(底紅の淡黑色)の精好なり御髮は稚兒髷に上げさせ給へるが常の御愛嬌の見ゆさせ給はぬは寫眞に嫻れさせ給はねばなるべし常には無地の縫模樣七絲緞の織模樣など召す事あれど御袴の色目は御袖の止るまで變る事なきが皇家の御制めなり御髮は下げ髮にリボンを結ばせ給ふ事もあれどいかなる折にも御袴を脱せ給ふ事なきは衣と裳と同の制のこの御わたりにのみ殘れるぞうれしき

偏愛のあるべき御わたりならねど幼心には好もしきものあるべきに御嗜好總てに偏り給はずたまたま御調度の御用を仰せ出さるゝ御事あれども幾日を經るとも御催促遊ばされしことゝては在しまさず又動物なども御愛は平等にして狆よ洋犬よとは仰せられぬ輓近は海軍士官の朝鮮より齎らしつとて丹頂の鶴を獻納したりしかば遠來の獻納なりとありて御手づから餌など飼はさせ給ふのみ唯尚齒の御こゝろばゑばかりはいと深く老人を愛させ給ふは　兩陛下の大御心に似させ給ひけん今年大磯に御避寒の砌には大磯小磯なる八十歳以上の老人九十名を最寄〳〵に集はして御成の御道すがら御覽あり美事なる御菓子を賜はりしが當國一の宮なる寒川神社御參詣の節には兩宮より小松の御手栽ありてのち土地の老人(八十歳以上)七十人を拜殿に召させられ濁れる聲もて種々の御話し申し上ぐるを聞召されて御

菓子あまた賜ければ老人ども生るかひありと老の目に涙を湛へ枯木の如き手をうち顫はして恩賜を拜戴したりとぞいふなる

あはれめでたき姫宮よ、事毎に斯て在まする如く何者にもあれ一たび御覽せられしは忘れさせ給ふ事とては在しまさぬ餘りに〳〵御熱心なれば御教育申し上ぐる人々は其御熱心を押ふるやうにのみ心かくるよしなれど御頴悟の御天質は物に觸れ事に應じていと敏く御殿の敷地の故事を聞し召しては大石良雄等が孤忠を思召して安場男爵に古記錄を徵させられ忠臣自裁の遺址には札を立させて御散歩の折ふしに御憑弔の御氣色おはしまさなが大名小路の邸にありし物とて其由來を諮ね給ふなど申しも盡されず世の常の子には智惠の進めよとこそ教ふれ熱心なれとこそ導け御智惠をも御熱心をも强て御押へ申し上ぐるは人情に背きつるやうな

がら斯くせでは御健康もいかゞと情を枉げて情を致すいと難き事なりと折ふし人に物語りきとなん傳へ聞きける

麻布御殿

麻布區市兵衛町一丁目といふにあり元は梨本宮邸と子爵毛利元敬の邸とに分れりしを明治二十四年四月宮内省御用邸と定められ同九月十五日といふに青山御産所より御移轉遊ばさる、此御殿に在しますは即ち

第八の皇女、第九の皇女の御二方にして

富美宮允子内親王殿下

泰宮聰子内親王殿下

にわたらせ給ふ、富美宮の御方は明治二十四年辛卯八月七日の御生誕にして御齢正に八年十箇月に在しまし、泰宮の御方は同じ二十九年丙申五月十一日の御生誕にして御齢はづかに滿四年の御幼稚に在

します、御敎養主任は子爵林友幸之を奉はり夫妻心を盡して御敎養なし奉れり

この御殿は御二方ながら御いとけなく在しませばこれよかれよと漏れ承はるふしは尙少なけれども聰明頴智に在します事は高輪御殿の姉宮御方にもいかで讓らせ給ふべき、別てこの御殿は御二方ともに勝れさせられて御健全に渡らせられ御年より見まゐらするに御發育もいと麗はしく御長も高く御肉づきも豐かにおはすれば萬の事の御智惠づきもすぐよかにして御氣質のあどけなく爽やかに渡らせ給ふこと秋のもなかの明月のみそらに澄わたりたらんが如く御前にあらんほどは身も心もいと清く憂ひある身も更に曇れる隈なきこゝちすと申す、誠にめでたき皇女にわたらせ在します

泰宮の御方は尙御遊戯のみの御齢に渡らせ給へば別に御敎育の課程

とても在さず、富美宮の御方とても御教授役は華族女學校なる村田梅ケ枝一人之を奉はり御歌所員阪正臣御手本をさし上ぐるに止るものから御日課は高輪御殿の如くいと嚴肅に履まさせられ今は周宮の御方と一學年を隔つる三學年級の程度に進ませ給へり

五十鈴の宮の御すゑに備はらせ給ふ御方にいづれか皇上の御特質を具へさせ給はぬは在しまさねども富美宮御方は御才すぐれて賢く何事にもいと頴利にわたらせ給ひながら御斟酌の御美德と御慈愛の御淑德とは高輪御殿とつゆ變らせ給はず御遊の折は飛鳥の如く手にもとられぬばかりいと御活潑なるに拜謁の折ともなれば御行儀の正しく御威嚴の高く在しますこと御容貌の勝れて麗はしく在するだけにいやまして神々しくぞ渡らせ給ふ、御堅忍はいづれに變らせ給ふ御事とても候はねどもこの御方の御才の賢きは御讀書科に於て屢教師

の驚嘆しまゐらする所にして例之一の事項を御講義申し上ぐれば直ちに次の事項を御解釋遊ばさるゝに毫末だも意義を誤らせ給ふ御事なし、又御性質の緻密にして理解力に富ませ給ふこと御學科のうち別きて算術科に於て常に滿點を得させ給ふにても著けし、御懷字の寛裕にして物を容れさせ給ふことの大なるは御習字を遊ばるゝに細字には御筆の及ばぬ方なきにあらねども楷字の大書は極めて正格にして極めて優等に在します、こは父帝の御天性をや受けつぎ給ひけん、廣島御駐蹕の折から堀口物語てふ繪卷物を乙夜の覽に供したるものありしに　上にはいたく御心に適はせられそが殘闕のあることを知し召しければ其寫本を徵させられ還幸のゝち謄本につきて多田親愛に命じて書卷を書かしめ給へり其折ふし德大寺侍從長して仰せ下さるゝに　上には細書を好ましからぬ思召さるゝにより墨を濃く字

を太く認めて差上げよとの御事なりき仍て親愛は大中二様を認めて旨を伺ひけるに乙夜の覽に入るものなれば大字の方をこそとて親愛は遂に太字もて淨寫し奉つりしにあはれ名筆やと御賞美あらせられけると承はりぬ、富美宮御方の大楷を見事に遊ばるゝを伺ひまゐらせて　陛下御嗜好の程を懷び奉つるもいと畏くてなん

春の夜はいと長し常には八時過るころ御寢なれども御つれ〴〵に在すれば梅ヶ枝が女のふぢ子とて年は一つまさりの十一ながら宮御方には比ぶべうもなき姿も心も幼きが母とゝもにお伽まゐらせて小倉百首の歌がるたを遊ばさるゝに富美宮御方は例の御特質とて御目敏く讀むに從うて拾ひ給ふに泰宮の御方のいつしか字體を覺ねさせ給うて愛らしき御手さし出しこれも宮様のあれも宮様のと拾はせらるれば富美宮の御方は興ある事に思召されて種々に御からかひあり泰

宮の御方はさすがに御幼稚に在すればうるさしと思召してやかるたをかき交せて御抱守に縋り給ふなど御愛らしき事かぎりなくいかならん御いたづらを遊ばさるゝも姉宮の御方にはいと〳〵愛らしげに笑せ給ひてお頭など撫でさせられ慰め在します御友愛はさる御事ながら餘りのお睦まじさを見上げまつりては子爵夫妻も時に老の睦をしばたゝく事ありとぞ

御遊びもさして高輪御殿と差異在しまさぬ鎌倉御用邸に在しましては時々建長寺、圓覺寺などに御運動あり暖かなる日は由井ヶ濱邊に出ましして貝なんど拾はせ給ふ、御成御還とも常に御徒歩なれば車夫若くは馬方或は農夫、漁翁などの路さりあへず斯くと見まゐらせて遽だしく荷を下し頭の手拭脱し蹲まりて敬禮せんとするに御方には斯くと御目敏く知し召すからに故に知らず顔して御足はやく通らせ

給ひ御口づから仰せはあらねども民の煩ひを避させ給ふ御美性は常の御行狀に隱れんやうなく偶ま得避け給はす敬禮を受けさせ給へば牧童にもあれ蜑女にもあれいと御愛嬌深く御鄭重なる御答禮を賜はるのみならず一ぴ敬禮し奉りたる者は幾千人といふとも御記憶遊ばされいとゝ親しげに御答禮あること都にても鄙にても更に渝らせ給ふ節なし、姉宮のかく在すれば御幼稚ながら乙宮の愛々しくうちは道芝にうち伏して少時は面を上げ得ざること屢次在します

才すぐれたるは靜かならぬが常なるに皇家の御才には差在すると覺して富美宮御方の御肅かに優にやさしく在しますは御詠草にても著けからまし、皇后の宮にや似させ給ひけん御歌の御志殊に深く在しまし敎へまゐらせぬに時にふれては詠めやらせ給へば御學科の程度

より申さば尙早けれども好ませ給ふみちなればとて梅ヶ枝も折々御兼題を上るに優美の御心は忽ち金玉の言の葉となりて三十一文字を綴らせ給ふ、今御近詠の二三を拜承せるまゝ恭しくこゝに揭げ奉りていかに御才愛たくおはしますかを察しまつるよすがとせん

嶺　花

山の上に雪かとばかりみねつるは
いつしか咲ける花にぞありける

閑居鶯

しづかなるところにすめば鶯の
聲ものどかにきこゆなるらん

嶺松年久

山松のとしへてさへもうつくしさ

みどりの色をあらはしにけり

春雨

もえいでし柳の葉よりつゆたれて
しづかにふれる春雨のそら

御年を數ふれば僅かに八年十箇月にして敷島の道にふみ入らせ給ふこと斯くの如く深く斯くの如くめでたし四千餘萬の臣下に御同齡の女幾百萬かあらん誰かは御風藻の麗はしさに及び奉るものぞ

御服は高輪御殿と同じく今日の御影なるは緋鹽瀨に縫模樣の御召にして濃紅色の御切袴なれば御常の御わりさまなり泰宮の御方の御袴召させられぬは童たちに在して御袴着遊ばさねばなるべし日々の御物は朝に牛乳と邦食を遊ばし御晝と御夜食とは洋食を聞し召し果實はなか〳〵に多く聞食す御起床は六時三十分が今の定めにて成るべ

く御安眠の時間を長からしめんとの注意にて夜は八時には御寢に入らせ給ひ御枕側に歷史を講ずること孰方も異らせ給はず

高輪、麻布の兩御殿なる御居間の御襖には重要なる歷史畫を描きまゐらせ夫より御國產の第一なる養蠶の業を掃立より順次に絲となり絹となるまでを寫し奉り、是も御國產たる陶器の揑土より同じく皿鉢碟茶盌などの用器に製するまでの順序、及び米麥の播種より穀となりて俵づくりするまでの順序を寫し奉り常に御座ながらに農工の粒々辛苦の狀を知し召さるゝ助けとなしぬ、夫の清涼殿に賢聖の御障子を繞らし給ひつるが如く嵯峨の帝の離宮に唐犂の繪の御杉戸を設けさせ給ひ　近くは英照皇太后の御田つくらせて耨はせ、皇后の宮の新宿御料地に製茶養蠶の業を親躬ら遊ばさせられつるが如く皇上の黎庶を憐れみ思し召さるゝことを總て斯ばかり切に思召す坤輿

の上國といふ國星の如く列れども萬世一系の　皇室を奉ずるは獨り
我が東洋の君子國のみ此大御國に生を得て此　皇室を戴き奉つり油
の如き德露に育せらるゝ吾人臣子の今日の慶たき嘉節を迎へて皇基
億歳の瑞を頌す何の光榮か之に及かん謹んで御稜威の因て發する尊
影を寫し奉り恭しく皇室の旦暮を承るまに〳〵記し奉ること爾
君が代は千代にやちよにさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで

御園の松風

古を稽へて今に則るは禮の要道にして國家儀式の威重ある所以な
り東宮の妃を立させ給ふに嚴肅なる儀例を用ひさせ給ふは寔に明
治聖代の御創制にして皇室婚嫁令の規定する所こたびの御慶典に
起りて千代萬代の末までも富士の高嶺の動ぎなき御例しいともめ
でたき極みなるべし八重雲深き九重の内の御事は輒く窺ひまゐら
すべきにあらねども御儀式のありさまなど御園
の松風のもれ聞ゆるまに〳〵かつかつ記し奉りて國儀の莊重なる
故由を懷びまゐらせんも司筆の職に務むる道ならんかし

御成約後の妃殿下

今歳の二月公けの御式を履せられ從一位九條孝道公の御女節子姫と

御結婚の御成約在せられ伊勢の太廟大和の畝傍山并びに山城の月輪山なる御陵に奉告し給ひてよりは常に九條邸の別殿に御座しつゝへて萬の御調度も總て宮廷の御賄ひを受けさせ給へり茲に　英照皇太后御入内の儀例を按じ奉るに萬の事何それとなく九條殿にて調達あり御當日に至りては寢殿に美麗なる御帳臺を設けて御親子の御座となし薫物の御使陰陽師の勘文などの式ありて御書使の勅使の參向するを待ち勸盃の事ありて夫々に祿を賜ふなどなか〳〵嚴かなる儀あり畢りて三位御方は檳榔毛代の御車に召し鹵簿華やかに朔平門より内に入らせ給ひけるが今度は全く御當日とても御帳代又は賜祿等の御事はなく妃殿下には朝の餉まゐるとそのまゝ御裝束を改めさせられ東宮御所より差遣はさるゝ中山東宮大夫の御迎ひを待ち受け給ひ御馬車の來るとゝもに内侍女房をのみ召具して宮城正門より内に參

られ賢所の大前なる便殿に着かせたまふ御あらましとぞ承はりぬ

賢所の大前

賢所の大前に大婚の禮を擧げさせ給ふ御事は國初より以來こたびを以て嚆矢とす御次第にも定めさせられつる如く朝疾くより神殿を裝飾し便殿には古代の御椅子に二疊臺敷きたるを安排して兩殿下の御座に充るの外別に裝飾を施すことなし此處に仕ふまつる掌典は孰れも素絹の祭服を着し掌典長および式部職、侍從等は悉く位官に相當する衣冠に威儀を正す事となれり掌典は常より其儀に熟れたるも式部職侍從等は位階の當色ありて衣冠に嫻はざる向もあれば去る一日一たび修禮を行ひたるが四位の黑色と五位の赤袍と掌典の素服と禁苑の新樹に相映じて全く畫中の景を現じたりとなりこゝにて御告文を奉讀あらせ給ふ皇太子殿下の御裝束は御一代に再び召させ給ふ

まじき御束帯にして妃殿下も同じき御物の具に渡らせ給へば御當日の御儀式のいかに嚴肅にいかに典雅にいかに壯麗たるべき

皇太子殿下御束帯

謹んで東宮御束帯の御模樣を承はるに古式の如く袍、下襲、裾、單、表袴、大口に石帶を添へて服させらるゝ御事にして御色目綾文は左の如し

△袍は米織紗の地質にして色目は鞠塵（黃櫨色）に窠の內に向ひ鴛鴦の丸の文あり、裡も同じ色の羽二重なり

△下襲は遠菱紗にして文は白地に小葵の織出しなり、裡も同じ色同じ文同じ地

△裾は紅地の綾に小葵の文あり、夏の御料なれば單にて召させ給ふ

△單は繁菱綾の紅にして地文あり

△表袴は白地にして窠に霰の浮織あり、裡は紅打の絹を用ひさせらる

△大口は紅精好の引返しなり

△御石帶は瑪瑙にしてこは新たなる物面白からねば御先例もある事として攝家に就て索められしが鷹司家に恰好のものありしかば之を御買上げとなりて用ひさせ給ふとぞ

其外御冠（釵子）、御沓平緒等式の如し

妃殿下の十二單

世にいふ十二單とは唐衣、表衣、打衣、五衣、單御召物二つ、御袴二つ十二を襲ねさせ給ふ謂にして見るだもまばゆき御裝なり

△唐衣は緯を赤に經を紫にしたる二重織物にて龜甲の地紋ある上に窠の浮模樣ありて縹の小菱綾やの裡つけて召さる

△表衣は花山吹重ねの二重織物なり即ち緯を鬱金に經を萌黄に織りたるものにて小菱の地紋の上に紅の鸚鵡の丸の浮模様あり裡は青地とす

△打衣は皆紅の綾なり

△五衣は堅織の綾にして藤縱枠の地文ある薄蘇枋色のものを五つ襲ねて召す之を蘇枋重ねと申すされども時首夏の事なれば今度は比翼縫にして胴ばかりは單にて召さるべしとぞ

△單は堅織の綾にして青色に幸菱の地紋あり

△裳も三重襷の白地を六巾に綴合せこれに極彩色もて下より桐を畫き上に鳳凰を畫けるもの

△御袴は二つながら紅の精好にして表袴は長にて召させ給ふ

この外御冠、檜扇、三山沓など式の如し

右に列記しまつる御式服は曩に御結婚御成約あらせらるゝとゝもに中六番町なる御用達高田茂に御下命ありて調進せしめられつるが高田にては三番町に清淨なる織殿を作りて御内意の旨もあれば總て手織に織立てたるなり宮中の御料は綾文に有職の故實あるのみならず地合も自から別なれば日に一尺を織るも容易からぬ手織職工の拂底なる折からとて苦心に苦心を積み夙夜勵精御慶典數日前悉く調進し了りたるものゝよしなり

編者附記す、翠竹紫藤以下は御慶典に就ての大阪朝日新聞記事の轉載にして同社の承諾を經たるものなり茲に其厚意を謝す

文辭の御影のほとに及べるは全紙附錄をさせるなり今こゝにてとさらに删らでさしおく

春八十六句

蜆掘るや閑居の村の境川　子規
陽貴妃の化粧道具や海棠花　同
出代の髪結ふてやる内儀哉　鳴雪
行春の落葉焚きゐる畑かな　同
日暮るゝにいよゝ菜の花曇哉　碧梧桐
公園の花ちる中をあるきけり　同
鶯は老いし桜木の若葉かな　虚子
菫より小さき蝶や小紫　同
楼の上ののめやうたへの櫻かな　四方太
又しても人に逢ふたる櫻かな　同

葉櫻にす袷したる美人かな　青々
よき幕の裾やさはりて木瓜の花　同
月の梅橋に人語の響哉　露月
青草にはぢかれにけり春の雪　同
人込やかゞりあぶなく櫻ちる　霽月
首筋に散るや冷めたき朝櫻　同
凧の緒のすこしぬれけり溜水　把栗
途中から用事をすてゝ花見哉　同
村に入る小間物商や桃の花　牛伴
下る雲雀上る雲雀のよそ心　同
行春を鯛の目玉のにぶきかな　紅緑
曲水の九條家まねく近衛哉　同

櫻狩平氏なる身の果報哉　露石
雨はれてあぶの羽音や山櫻　同
さゝ事や雛の盃とりかわし　墨水
ひし餅は鼠にひかれ雛二對　同
腹赤に別れて行くや鮠の群　三子
別れては集る鮠や水の波　同
輕業の荷をたてかけし柳哉　紫人
ふらゝとに姉の草に履をかりにけり　同
二日灸糞する鳶を眺めけり　抱琴
ふらゝゝや後向なる高話し　同
行春や牡丹勝ちなる植木市　井蛙
窓あけて山を見るなり二日灸　同

片隅に火燵をしたる餘寒かな　鬼史
後から雉立つ春の山路かな　同
若草の岸に舟つく渡かな　別天樓
若草や礎のこる寺の跡　同
鞦韆をとび下りけり竹の上　椽面坊
鞦韆の調子づいたり乘心地　同
意地悪き役人も居て繪踏哉　秋窓
嘆願も聞き屆けなき繪踏哉　同
二日灸をとがい乘するひさ頭　北渚
足入れてぬるき火燵や春寒し　同
伽羅くさき揚屋布團や宵の春　圭岳
ふらゝこや櫻もありて園廣き　同

ふらや砂におりたつ力足　巴子
ふらの調子づかして貰ひけり　同
鶯のすり餌につみし若菜哉　四明
整列の練兵霞む野面哉　瓦山人
傘借りて茶屋を出けり藤の花　稲青
堀かへす畑の土や春の霜　露葉
鼠よけのまじないしたる蛋哉　青藍
兩岸の櫻を見るや橋の上　圭子
桑の木に繻絆かけたり畑打　北湖
藪の中に黑き蝶々の番ひげり　明村
裏戸出て藪の小道や春寒し　露子
姉妹の顏美くしき茶摘哉　雲軒

行春を姫の御腦や繪卷物　燕洋
接木して袂の土をはらひけり　江外
藪行きてふみにじつたる椿哉　薫水
子をつれて河原を歩く春の風　筧
頰杖の眠り心地や二日灸　鏡月

長春譜　終

ふた葉の一大進歩

今春ふた葉改善を施してより茲に半歳、關西文壇の重鎭たる名實を全うするを得しが、今讀書社會の趣向に考ふる所あり、次號に於て再び一大飛躍を試みんとす時流の文學、思想界の趨勢、趣味の高卑に就ては編輯主任たる角田浩々歌客氏事らこれに任じつとめて剴切なる批評と精細なる報道を怠らざるべく。創作に於ては久しく雌伏して消息を文壇に絶ちし三木天遊氏が苦心の作と平尾不孤氏が數年來經營の作とを掲げて讀書社會の渴望に充つると共に大方評家の鑑賞を待たんとす。文苑に、雜錄に、彙報に、新刊批評に如何ばかり面目を一新するかは請ふ次號以來の本誌に徵せよ。

長春譜

ふた葉定價

一部金拾貳錢壹錢ハ郵券代用ハ五厘券
六部七拾四錢六錢ニラ一割
十二部壹圓四拾四錢拾貳錢增トス

廣告料 五號活字二十四字詰一行一回に付廿錢半頁金五圓 一頁金九圓ナリ

○爲替振込所ハ東區北久太郎町受取所
○御注文ハ一切前金ヲ要ス
○代價領收證ハ差出サヾルニ付雜誌ノ到着ヲ以テ金圓落手ト御承知アリタシ
○御注文ノ節ハ住所姓名詳細楷書ヲ以テ御認メヲ乞フ
○應答ヲ要ズル返言ハ必ズ返言郵稅御送ノ事

ふた葉第三卷第四號臨時增刊

明治三十三年六月二十日 印刷
明治三十三年六月廿三日 發行

毎月一回十五日發行

編輯兼發行者 大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷 金尾種次郎

印刷者 大阪市西區阿波座一番丁六十番屋敷 大阪製本印刷株式會社代表者 矢野松吉

發行所 大阪市東區南本町心齋橋東北角 金尾文淵堂書店

文學雜著

詩國小觀

浩々歌客君著下村爲山君畫

青年銷夏の時は近けり、銷夏の好伴侶たる詩國小觀は出でたり

田園生活、人生の理趣、自然と戀愛及時文に關する青年の情想見解は錄して此中に在り、銷夏の好伴侶たる詩國小觀は出でたり

袖珍美裝
定價四拾錢
郵税六錢

新意匠頗美裝　定價金四拾錢　郵税六錢

アートタイプ版入

暮笛集

薄田泣菫君著　赤松麟作君畫
丹羽獸仙君畫

增訂第二版

暮笛集は薄田泣菫君の新詩集なり。斯集出でゝ是非褒貶の聲相次ぎ、評壇爲めに幾多の波瀾を擧ぐ。今詩に删正を加へ卷尾に有ゆる江湖の評言を摺り加へて再版は成りぬ。表紙の彩畫、本紙の二度摺、挿畫の朱、綠、紫、褐に染め分けられたる、孰れか出版界の珍にあらざる。評言抄出して次にあり、この集の一班を窺ふに足らんか。

新小說（後藤宙外君）上畧……泣菫が作は優に藤村晩翠の二氏と對壘して決して下らざるの伎倆あるは此集を讀む者の必ず首肯する所あらん。從來慣用せられたる七五又は五七の調以外更に八六の調を選みて一種の雄勁にして沈痛なる格を用ゐたるは新詩壇に一大貢献をなせる者と云はざる可からず。……下畧

國文學（與謝野鐵幹君）羨む勿れ市にたち、唇赤き友の上、百千の笛を調ぶとも聽くことあらじ斯る音は。

讀賣新聞（森靜君）上畧……世の暮笛集を讀まん人に先づ泣菫の詩の「趣」を味はんことを切望すると共に彼は如何に詩の爲めに熱中して而ていかに詩のなやみに轉輾反側しつゝあるかを記憶せられんことを切望せざるを得ず。

櫻州青年（黑田湖山君）上畧……自分の見た所泣菫氏の第一の長所は其火の如き熱情である此熱情は到る處に迸つて金石の音をなしつゝある……下畧

女學雜誌（青柳有美君）泣菫は詩人也、熱情ある詩人也恐らくは詩美神を崇拜して物狂はしくなる迄の詩人なるべし……その鞠窮として苦心せるの跡明に文字の上にあり、思想の如き富膽にして單調に陷れる弊見えず……下畧

帝國文學　上略……泣菫は情あり血あり涙ある詩人なり……楚々清婉の筆以て吟誦すべく、多恨多感の辭以て同情の涙を催すべきは此集の特色……下略

萬朝報　（堺枯川君）蕪雜粗漫、平弱無味予は勉強して僅に其三分一を讀誦し了りぬ……下略

世界之日本　其聲不平にして調は悲愴を帯び、其句は短刀直入的にして、其詩は靄々たる春に非ず、寧しろ秋霜烈日の姿を呈す……下略

＊　＊　＊

新體詩集 行く春

薄田泣菫君 新著　滿谷國四郎君 書

クロース綴、寸珍新意匠頗美装、アートタイプ版入

定價 金四十錢　郵税 金六錢

在五中將の詠に曰はく「花に厭かぬ嘆きはいつせしもかとも今日の今宵に似る時ぞなき」と。行く春は花に厭かぬ嘆きをのべたるもの、これを披いて錦綉の眺めあるにあらねば擲ちて金石の響するにも非ず。譬へば夕暮の風に搖ぐ蘆の葉の如く微韻いさゝか詞流の邊りに趣きを添へ得べくば作者の望足る。吟身未だ愁去らむ煩らへるを慰む可くもあらねど許し玉はゞ花落ちて春辭するの夕盃をふくみて君と共に涙を揮ふを辭せざるなり。包む所牧童歌、石像賦、海棠歌、老鶯、郊公賦、放金朱鳥、悼情死歌、暮春頌、巖頭沈吟、夕の歌、嬌語絶句三十篇以下斷片十數首、詩題の多くが關はる季節によりて名づけてゆく春といふのみ、

月郊高安三郎君著
中村不折君畫

社會小說

金字塔

顏美裝アートタイプ版入

定價　金四十錢
郵稅　金四　錢

維新以來社會の變遷を景として學者政事家宗教家資本家勞力者華族貧民貴女工女孤兒等出入し主人公は千古の疑問に苦しむ者悲劇か喜劇か喜悲劇か悲喜劇か文學の革新を望む者人生觀を求むる者社會問題に注意する者は胸を打つ處あるべし

目次

大文字◉殺生石◉黃色の光◉闇◉義理の奧人情の底◉答ひとつ◉美人の手◉又如何◉答さま〳〵◉沙漠◉倶樂園◉同じ男か◉同じ女◉旋風◉花輪◉奴隷◉絕壁◉師走の月影◉むくひ◉赤き光